



Profile

池原 昭治さん

香川県高松市出身。市内在住の童絵作家。数々の新聞や雑誌に童話や民話、連載漫画などを掲載し、現在香川県の広報誌で表紙絵を担当。テレビ「まんが日本昔ばなし」の演出・作画・美術や、環境庁(現環境省)イメージポスター制作などを担当。



池原さんの公式ホームページはこちら▲



残しておきたい 狭山の風景

～8年4か月の軌跡をたどる

童絵作家の池原昭治さん独自の画風で、狭山の名所や景色を紹介する「残しておきたい狭山の風景」が、本年7月号をもって終了しました。今月は池原さんから伺った、このコーナーに込めた思いや苦勞などと共に、100回の連載を振り返ります。

▲第98話 茶どころ「さやま」



▲第100話 さやまの歴史を刻む入間川



欠かせない風景であり、最も描くのに苦勞をします。川を描く上で外すことができないのが空。グラデーションや流れる水面などを表現するのに、非常に繊細な筆使いが要求されます。また、もう一つ難しい要素が構図です。川を入れる割合や角度などは、いまだに悩み、正解にたどり着けません。

以前、入間川の投網なまに参加する機会がありました。普段は橋や河原から川を眺めています。が、初めて川の真ん中に立った時、川の大きさと空の広がりを感じたのです。最終回である第100話の入間川は、その時のイメージを基に描いたものです。

私は、「私の絵は『未完成』でいい」と昔から言っています。絵を見て満足していただくのではなく、絵をきっかけにその地へ足を運んだり、歴史について調べたりするなど、何かの取っ掛かりの一つになればいいと思っています。

100回の区切りで終えることとなりましたが、描いていないネタはまだまだまだたくさんありますし、私が知らない風景もたくさんあるはず。皆さんにも、もっと市内のいろいろな場所を訪れてもらいたいと思っています。

100回の連載を終えて

作品に影響を与えたこと

おかげさまで多くの方からご好評をいただき、公民館で「残

描くのに苦勞した風景

入間川ですね。狭山にとって

「残しておきたい狭山の風景」の前身「狭山の絵本」の読者だった方から、「故郷である狭山市の七夕まつりや『狭山の絵本』の昔話を自分の子どもに聞かせたところ、狭山に行ってみよう」と言い出したんですよ」という話を聞いたことがあります。狭山で育った人が大人になり、自分の子どもに狭山の昔話を語り継いでいるという話を聞き、嬉しくなりました。自分のやってきた「地域の民話や昔話を残していきたい」という思いが報われたと思つたからです。

続いて平成24年4月から始まった「残しておきたい狭山の風景」は、語り継ぐことができないお茶畑や雑木林、入間川といった狭山らしい風景を、形として残る絵として、私なりの表現方法で皆さんに紹介したいという思いから始まりました。

残しておきたい 狭山の風景に込めた思い



▲残しておきたい狭山の風景展